

研究紀要 第157集

「SDGsの視点からの学習活動研究部会」報告
— 持続可能な社会づくりの担い手を育むために —
小・中・高・特支校における実践に向けた提案として

私たちが考える「SDGs教育」



令和8年1月

一般財団法人 栃木県連合教育会

刊行にあたって

児童生徒が発達段階に応じて人格形成を図る中、児童生徒には、「持続可能な社会の創り手（「学習指導要領」前文）」となる資質・能力の育成が求められています。栃木県連合教育会では、先生方の要望などから設定した「SDG s の視点からの学習活動」をテーマとした研究部会を令和4年度に立ち上げ、この「創り手」にふさわしい資質・能力とは何なのか、そしてそれをどのように高めていくのか、さらなる授業の改善を目指し、実践を通じた研究紀要の作成を目的として、調査・研究を進めてきました。

令和5年度には、県内全ての小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童生徒・教職員・学校等、多くのご協力を得てSDG s 教育に関するアンケート調査を実施し、その結果をもとに小学校・中学校・高等学校・特別支援学校それぞれの考察（中間報告書）をまとめ、研究紀要第156集として刊行いたしました。また、令和6年度には、アンケート結果を踏まえ、SDG s を学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDG s の視点を取り込んだ授業実践を行うなど、SDG s と教育の関係を整理し、学校におけるSDG s への取り組みの新たな課題について研究しました。

今回の研究紀要第157集は、令和5年度に各学校にご協力をいただいたSDG s に関する調査結果に基づき令和6年度に実践した授業研究を、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校における取組としてまとめたものとなっております。栃木県の先生方には、この研究成果を少しでも栃木県の子供たちのために生かしていただければ有難く存じます。

最後になりましたが、研究紀要をまとめていただきました部会長の宇都宮大学共同教育学部教授の出口明子先生、指導助言者の栃木県教育委員会・栃木県総合教育センター・宇都宮市教育委員会の先生方、具体的な指導に即した形で調査・研究を進めていただきました小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の研究委員の先生方に、衷心より感謝申し上げます。

令和8年1月

一般財団法人 栃木県連合教育会

目 次

刊行にあたって

第1部 研究部会のこれまでの歩みとSDGsの視点からの学習活動の今後の展望

- 1 SDGsの視点からの学習活動研究部会の発足の背景 1
- 2 令和4年度～令和7年度までの取組 1
- 3 栃木県教育研究発表大会における報告（令和5年度、令和7年度） 2
- 4 学校におけるSDGsの視点からの学習活動の意義と今後の展望 2

第2部 小学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 テーマ設定の理由 6
- 2 特別の教科 道徳「みんなのためにはたらく 第3学年」におけるSDGs教育の展開 10
- 3 特別の教科 道徳「仕事のやりがい 第3学年」におけるSDGs教育の展開 15
- 4 特別の教科 道徳「働くということ 第5学年」におけるSDGs教育の展開 20
- 5 特別の教科 道徳「社会や公共のために役立つ 第6学年」におけるSDGs教育の展開 24
- 6 研究の成果と課題・今後の展望 28

第3部 中学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 はじめに 29
- 2 社会科「平等権～共生社会を目指して～」におけるSDGs教育の展開 31
- 3 理科「化学変化と原子・分子」におけるSDGs教育の展開 37
- 4 理科「エネルギー資源とその利用」におけるSDGs教育の展開 43
- 5 おわりに 48

第4部 高等学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 テーマ設定の理由 49
- 2 実践①教科教育においてSDGsの視点を取り入れた学習活動 50
- 3 実践②SDGsの視点を取り入れた進路に関する学習活動 61
- 4 成果と今後の課題・おわりに 68

第5部 特別支援学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 はじめに 69
- 2 具体的な指導展開① 70
【知的障害特別支援学校 高等部 通常の学級課程2】
- 3 具体的な指導展開② 74
【知的障害特別支援学校 小学部 通常の学級課程1】
- 4 まとめと今後の展望 79

第6部 資料編（令和4年度～令和7年度まで4年間の研究部会の歩み、栃木県教育研究発表大会における報告、研究部会委員一覧、参考文献・参考資料等）

- 1 SDGsの視点からの学習活動研究計画（令和4年度～令和7年度） 81
- 2 SDGsの視点からの学習活動研究部会組織（令和4年度～令和7年度） 87
- 3 参考文献・参考資料等 88

第1部 研究部会のこれまでの歩みとSDGsの視点からの学習活動の今後の展望

1 SDGsの視点からの学習活動研究部会の発足の背景

栃木県連合教育会が行う様々な事業計画の中に「調査研究及び研究物等の出版に関する事業」がある。

その一つとして令和3年度まで「主権者教育研究部会」という部会があった。この部会が終了するにあたり、新たな研究として設定されたのが「SDGs」に関わる学習活動の研究であった。このテーマの設定にあたっては、各学校に対して実施したアンケートの結果として「SDGs」の希望が多かったことなどによるものである。

本研究は、「調査」と「調査に基づいた研究」を基本に据え、令和4年度から令和7年度までの4か年間の計画とした。

研究部会長には、本県の小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の現状と、理科教育学、科学教育、環境教育及び生物多様性保全教育などに詳しい人物として、宇都宮大学共同教育学部の准教授（当時・現教授）出口明子氏に依頼するとともに、指導助言者（5名）として、県教育委員会事務局義務教育課・高校教育課・特別支援教育課、県総合教育センター研究調査部、宇都宮市教育委員会事務局学校教育課の指導主事に依頼した。

また、研究委員（11名）については、栃木県小学校教育研究会の「社会部会」、「理科部会」、「生活・総合的な学習部会」、栃木県中学校教育研究会の「社会部会」、「理科部会」、「総合的な学習部会」及び栃木県高等学校教育研究会の「地歴・公民部会」、「理科部会」、「特別支援教育部会」の各部会長から推薦をいただき依頼した。

2 令和4年度～令和7年度までの取組

(1) 令和4年度取組 【資料1】：令和4年度の歩み p81 参照

令和4年度には、今後のスケジュールの確認とSDGsに係る研究活動に関する課題の整理と対策について検討した。また、次年度に実施する小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校を対象としたSDGsに関するアンケート項目について検討した。

(2) 令和5年度取組 【資料2】：令和5年度の歩み p82 参照

令和4年度に作成したアンケートについて、6月～7月に県内の公立・私立全ての小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校を対象に調査を実施した。その結果について分析や考察を行うとともに、その研究成果を研究紀要第156集（中間報告書）としてまとめた。研究紀要156集（中間報告書）については、本教育会のホームページに掲載するとともに、県内各学校及び各教育関係機関にホームページへの掲載についての案内通知を発出した。また、令和5年度栃木県教育研究発表大会において、その成果（中間報告）を報告した。

(3) 令和6年度の取組 【資料3】: 令和6年度の歩み p83 参照

SDGsに関するアンケートの調査結果を踏まえ、SDGsを学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDGsの視点を取り込んだ授業実践に向けた検討・協議を行った。また、研究授業実施後、SDGsと教育の関係を整理し、学校におけるSDGsへの取り組みの新たな課題について研究した。

(4) 令和7年度の取組 【資料4】: 令和7年度の歩み p84 参照

令和6年度に取り組んだSDGsに関する授業研究の成果を、研究紀要第157集としてまとめた。また、令和7年度栃木県教育研究発表大会において、その成果を報告した。

3 栃木県教育研究発表大会における報告（令和5年度、令和7年度）

各学校等へのアンケート調査結果を踏まえ、SDGsを学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDGsの視点を取り込んだ授業実践を行うなど、SDGsと教育の関係を整理し、学校におけるSDGsへの取り組みについて研究した成果を栃木県教育研究発表大会において報告し、指導・指摘を受けることで研究の改善と深化に努めた。

【資料5】: 令和5年度 栃木県教育研究発表大会 SDGs部会の報告 p85 参照

【資料6】: 令和7年度 栃木県教育研究発表大会 SDGs部会の報告 p86 参照

4 学校におけるSDGsの視点からの学習活動の意義と今後の展望

(1) SDGsの視点からの学習活動を展開することの意義

これまでの歩みに見てきた通り、研究部会ではこれまでに、学校におけるSDGsに関する取り組みに関する調査、それに基づく課題整理、さらにその課題を踏まえて授業実践研究を展開してきた。ここで改めてSDGsの概要を確認すると、SDGsは「持続可能な開発目標」として2015年の国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でより良い世界を実現するために設定された17の目標である。貧困の撲滅、教育の質の向上、ジェンダー平等の推進、気候変動への対策など、多岐にわたる課題に取り組むものであり、全ての国と地域、そして私たち一人ひとりが取り組むべき包摂的課題として位置づけられている。教育現場においても、現行の学習指導要領では「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記され、児童・生徒が持続可能な社会を実現するための知識や技能を身につけることが求められている。

近年においては、SDGsに関わる理念は「17の目標」を超えて、人間の幸福（ウェルビーイング）やレジリエンス、社会的包摂といった新たな価値軸へと拡張しつつあり、「SWGs（Sustainable Well-being Goals）」という考え方が注目されている。すなわち、持続可能性とは「課題を解決する力」だけでなく、「自他の幸福を共に築く力」であるという理解が広がっていると言える。このような変化は、学校教育においても大きな意味を持つ。SDG

sを学ぶことは、知識を習得することだけではなく、多様な他者や環境との関係性の中で、自分の生き方を問い直し、よりよく生きる力（well-being）を育む営みである。すなわち、「自分たちの行動が社会の未来を形づくる」という実感を伴う学びが重視されているのである。また、こうした学びの在り方は、持続可能な社会の創り手を育てる「ESD（Education for Sustainable Development）」の理念とも連続しており、「学ぶこと」と「社会をより良くすること」が一体化した教育として、次世代の基盤を成すことが示唆される。教科の学びや探究的な活動を通じて、児童生徒が社会課題を自らの問題として捉え、協働的に解決へと向かう力を育てることこそが、SDGsの視点を取り入れる最大の意義であると言える。

(2) 各学校種の研究実践の特徴と意義

第2部以降では、本研究部会における各学校種別の研究報告を掲載している。SDGsの視点からの学習活動に関する意義、さらにはSDGsの次の理念として注目されるSWGs（Sustainable Well-being Goals）の視点を踏まえると、本研究部会で各校種別に取り組んできた授業実践研究には、次のような特徴や意義を見出すことができる。

○小学校

小学校の研究では、研究二年次のアンケート調査の結果を踏まえて、一貫して特別の教科「道徳」に関わる「働くこと」をテーマにした授業実践研究を複数実施している。これらの実践は、道徳科が本来もつ「価値の自覚」「自己の生き方の形成」という機能を、SDGs目標8「働きがいも経済成長も」と結びつけた点に大きな意義がある。授業後のアンケート結果では、児童が「働くことはお金のため」から「みんなのため」「社会をよくするため」へと認識を広げ、SDGsを自分ごととして捉える態度が育成されている。このことは、知識としてのSDGs理解にとどまらず、「どう生きるか」という道徳的实践にまで昇華されていることを示している。さらに、「児童労働」や「不平等」といった地球規模の課題に触れたことで、児童は身近な行動が世界の持続可能性とつながることを理解し、自己の行動が社会の改善に寄与するという自覚をもつに至っていることに着目していただきたい。

また本実践は、働くことを「苦役」や「義務」としてではなく、他者や社会とつながりながら自己の幸福を見いだす行為＝ウェルビーイングの形成過程として捉えている点にも意義がある。SDGsの理念を背景に、「個人の幸福と社会の幸福の両立」という価値観が児童に浸透しつつあり、これは近年着目されている「持続可能な幸福（Sustainable Well-being）」の実現にも通じる。この授業は「知識を得る学び」から「共によりよく生きる学び」への転換を具体的に体現しており、児童が社会の一員として自らの行動を選択し、未来社会を構想する基盤を培うものとなっている。

○中学校

中学校の研究では、各教科の専門性を生かし、日頃行われている授業を通してSDGsの

視点からの学習活動を展開することを指針としている。生徒の小学校での学びを尊重して継承しつつ、さらに高等学校での学習も見通しながら、持続可能な社会の創り手の育成を指向した、中学校段階に適した学習活動の検討と実践を行っている。

各授業実践の詳細を見ていただくとわかるように、各教科の学習内容をSDGsの目標と結び付けながら、身近な課題を科学的・社会的に捉え直し、持続可能な社会の形成に主体的に関わる力を育むことをねらいとしている。理科の環境問題、社会科の地域課題、エネルギーをテーマとした課題など、教科を超えた社会における共通課題を設定することで、学びが「教室内」から「社会の現実」へと拡張している点が特徴的である。これらの実践では、課題解決に向けて生徒が情報を収集・分析し、班で議論を重ねながら解決策を構想する探究型学習が展開されている。さらに、地域との連携（地元企業や自治体職員へのインタビュー、地域資源の活用等）を通じて、生徒が「自分の学びが社会に役立つ」ことを実感できる構成となっている。

これらの学習活動におけるSDGsの視点からの探究は、生徒が自らの生き方・幸せと社会の幸福を結び付けて考える契機となっている。たとえば、「エネルギーの使い方」「地域の持続可能性」「福祉と労働の関係」といったテーマを扱う中で、生徒は「よりよく生きること（well-being）」とは何かを多角的に考察し、他者との協働を通して自分の行動を社会的文脈の中で再定義しているという特徴を見出すことができる。

○高等学校

高等学校の研究では、「地理探究」や「総合的な探究の時間」における進路探究を中心に、持続可能な社会づくりに関する課題を主体的に探究する学びが展開されている。「地理探究」では、単に知識を得るだけでなく、学んだ内容を基に「日本の地理的課題の解決策を構想する」ことを目的とし、生徒が主体的に課題を設定・探究し、他者と対話を通じて多様な視点を取り入れながら解決策を見直していく構成が取られている。特に注目されるのは、生徒が自分の考案した解決策を「SDGsの17目標」に照らして再考するプロセスである。「誰一人取り残さない」という理念を基軸に、環境・経済・社会の三側面から課題を多面的に検討することで、学びが社会の改善を志向する思考活動へと転換している。進路探究の実践では、SDGsを通して学びが進路探究と社会変革をつなぐ媒介となっている点に特徴がある。生徒は「どのように社会課題に関わるか」「自分の進む道で何を解決できるか」という観点から学びを再構成しており、単なる職業理解にとどまらず、社会の一員としての使命感や責任意識を伴うキャリア観を形成していると言える。授業後の振り返りでは、「自分の得意なことを活かして誰かの役に立ちたい」「将来の仕事で環境や地域を守りたい」といった記述が多く見られ、学びが社会的実践の動機へとつながっていることが示されている。

本実践は、知識の獲得を目的とする従来型の学習から、社会課題の探究を通して知を活用し、未来社会を構想する学びへと転換している点に教育的意義がある。生徒は課題発見から解決策構想までのプロセスを通じて、「自らの学びが社会の変化を生み出す」ことを実感し

ている。また、実践の成果として、生徒の多くが「SDGsへの取り組みによって地球の未来は良くなる」と回答しており、ポジティブな社会観の形成が見られたことも注目に値する。このように、本実践でのSDGsの学びは単なる課題解決学習を超え、ウェルビーイング（自他の幸福）とレジリエンス（困難を乗り越える力）を育む教育として機能していると言える。

○特別支援学校

特別支援学校の研究では、児童生徒の発達段階に応じ、日常生活と結び付けたSDGsの学びが行われている。本研究の中心的な特徴は、児童生徒が日常的に行っている清掃やごみ拾いといった身近な生活行動をSDGsの理念と結び付けることで、学びを社会的文脈に接続した点にある。SDGsという抽象的な概念から学習を始めるのではなく、「普段の活動が地球をよくする行動である」という教師の働き掛けを通して、児童生徒が自らの行動の意味を実感し、主体的に取り組む姿勢が育まれている。このアプローチは、SDGsの目標を「新しい知識として教える」のではなく、生活の延長線上に位置づけ、日常の行為を通して理解する構造をもつ。たとえば、校舎内外の清掃活動を行い、その変化を写真や動画で振り返る学習を通して、児童生徒が「きれいにすることの心地よさ」「人の役に立つ喜び」を実感している。こうした経験が、社会への貢献意識を育てる出発点となっている。

本実践は、特別支援教育の立場からESD（持続可能な開発のための教育）の理念を具体化している点でも意義が大きい。児童生徒の発達段階に応じて、清掃や分別といった活動を通して、環境への配慮や他者との協働を体験することで、「自分にできる社会貢献」を可視化している。さらに、活動を通して「気持ちが良い」「うれしい」「またやりたい」と感じるプロセスは、個人のウェルビーイング（幸福感）と社会的ウェルビーイング（他者・環境の幸福）を結び付ける教育的意義をもっている。学びが「他者のため」と「自分の幸せ」の両立を体験的に示しており、SDGsの理念を児童生徒の生活世界に根付かせる実践モデルの提案につながっている。

(3) 今後の展望

4年間の研究活動を経て、学校におけるSDGsの視点からの学習活動に関する今後の展望を述べるとすれば、SDGsを一過性のテーマではなく、学びそのものを貫く価値観として再構築することが求められるということである。2025年現在議論が展開されている次期学習指導要領の方向性によれば、AIの進展やグローバル課題の深化を踏まえ、「持続可能でウェルビーイングな社会の実現に向けて、自ら学び続ける人間の育成」が新たな方向性として明示されている。これはまさに、SDGsの理念と学校教育を結び付けるものであり、今後の学習活動の設計に大きな示唆を与えるものと言える。本研究部会が取り組んできたSDGsの視点からの学習活動に関する研究実践が、次代の学校教育における児童生徒の「社会の未来を創る力」を育む学びに資することができれば幸いである。